

【書評】

池野絢子著

『アルテ・ポーヴェラ——戦後イタリアにおける芸術・生・政治』

慶應義塾大学出版会、2016 年

金井直

20 世紀後期を代表する芸術運動、アルテ・ポーヴェラについて、作品を通して見知っている人は、日本国内にも実は案外に多い。とくに愛知方面には。というのも、ICA Nagoya が 1980 年代からさかんにアルテ・ポーヴェラ作家（以下、ポヴェリスティと記す）を紹介し、その後、愛知県美術館の展覧会にも一部の作家が登場（「イタリア美術 1945-1995：見えるものと見えないもの」1997 年）、さらに豊田市美術館による意欲的な収集と展示によって、アルテ・ポーヴェラは熱心な現代美術ファン、コレクターのあいだではよく知られた流派となっていたからである。流派？そう、眼前のクネリスやメルツを、嘆賞しつつ、あるいはもの派と引き比べるなどしながら、しかし、多くの鑑賞者には、それが流派なのか、グループなのか、現象なのか、いまひとつ判然としない状態が長らく続いてきた。アルテ・ポーヴェラという日本語表記自体、評者が 2005 年にアルテ・ポーヴェラ展を豊田市美術館で企画する時点でも、じつは未確立・不安定だったのである（結局、展覧会の副題に「貧しい芸術」と訳語を添えることになった）。こうした鑑賞経験と知識情報の不均衡を、ついに埋め合わせてくれることになったのが、本書の登場である（もちろん先駆的な『アール ヴィヴァン』のアルテ・ポーヴェラ特集〔1984 年〕は忘れられないが、内容はやはり導入的であった）。つまりこの出版の価値は学術的な次元に留まらない。本邦のアルテ・ポーヴェラ目撃者たちに、その経験を手堅く言葉に開く方法・手筋を、ようやく教授してくれるのが本書なのだ。

さて、そのアルテ・ポーヴェラであるが、特定の綱領に規定された会・グループでも、

共通の主題・素材・様式を分かち合う芸術家集団でもない。近代のさまざまなイズムのように、評論家勢による事後的なラベリングでもない。確かなことは、ひとりのインディペンデント・キュレーター、ジェルマーノ・チェラントによる1967年の展覧会名を発端とするということだ。そして変化を重ねてきた。本書では、第一～三章において、60年代当時の状況が多角的に分析され、第四章では、グループから個人の活動へと重心が移る70年代、そして第五章では回顧展を契機に運動全体の歴史化が進行する80年代以降が論じられる。

章ごとに見ていこう。第一章「否定の力」では、アルテ・ポーヴェラをめぐるチェラントの言説の変化が紹介される。すなわち、当初の彼の同語反復性への関心が、ほどなく闘争的な色彩を帯び、産業社会への敵意に転ずるや、むしろ視覚的イリュージョンに対するそもそもの忌避感に彩られるさまである。イメージが他領域へと拡張することを嫌う、チェラントのなかのイコノフォビア。それが彼によるポヴェリスティの人選、作品選択の傾向にも関わっているのである。

第二章「トリノの地政学」では、ポヴェリスティの活動の中心であった都市トリノの文脈に焦点が当てられ、50年代後半から活況を呈するトリノの前衛美術界、なかでもスペローネ画廊の重要性が示される。また、そこで活動をはじめたプロト・ポヴェリスティに共通する関心、すなわち絵画からの逸脱と、日常生活の要素のプリコラージュの導入、テーマとしての環境・居住が指摘される。そのうえでトリノの都市空間の変容へと論点が拡張され、さらに現実の都市空間に開かれた芸術実践の場「デポジット・ダルテ・プレゼンテ」が詳しく紹介される。この「デポジット」論は、一次資料調査にもとづく独自性の高い記述で、示唆に富むものだ。本書のなかでもとくに重要な箇所であろう。副題の「芸術・生・政治」とも強く共鳴する内容である。

第三章「実践のパラダイム」では、60年代美術の作品形態の転換、すなわち「もの」から「実践」への傾斜が、アルテ・ポーヴェラの文脈で振り返られる。トリノにおけるグループ展「コンテンプラツィオーネ」（1967年）における「行動」の重視、ボローニャ、デ・フォスケラリ画廊主催の誌上討論（1968年）に明らかな行動主義への傾斜（チェラントによる「貧しい行動」の主張）、そしてアマルフィにおける「アルテ・ポーヴェラ+アツィオーニ・ポーヴェレ」の不首尾。「もの」と「行動」をめぐる矛盾に、誕生間もないアルテ・ポーヴェラもさらされる。こうした経緯を確認したうえで、著者が注目するのが「作者」の位相である。パオリーニを例とし、近代的な創造的主体とも、バルトやフーコーによる作者の非特権化とも異なる、イメージに「参加する」作者の可能性が、具体的な作品分析を通して見いだされていく。狭義のアルテ・ポーヴェラ論を超えて、ポイエーシスとプラクシスの葛藤という60年代芸術のフレームの問い直しにもつながる刺激的な論述である。

第四章「前衛以後の古典主義」が取り上げるのは、70年代以降の、とくにクネリス、パオリーニの諸作品に顕著な文化的記憶の参照である。通常そうした傾向は、古典的要素

へのポストモダンの回帰と見なされ、現代美術史一般の動向と接続されるが、著者の見立ては別である。その鍵とされるのが石膏像の利用である。先行研究は概ね、古典古代、シュルレアリスムさらには人体中心主義という西洋美術史の参照をそこに読み重ねていくのであるが、著者はむしろ、イコノクラッシュの両義性、破壊することによって歴史に連なる身振り（クネリス）を看取する。あるいは、同一の石膏像を複数並べることで生じる模倣行為のメタ化、シミュラクル性（パオリーニ）を指摘する。ところでなぜ、彼らはポストモダンの歴史の引用に留まらなかったのか。著者は先行研究を十分に踏まえつつ、デ・キリコに見られるようなイタリア流の屈折した近代美術史の水脈を示唆するが、このあたりについては、石膏像受容の問題とともに、評者なりに考察を重ねてみたいところである。

締めくくりの第五章「更新されるアルテ・ポーヴェラ」では、80年代以後のアルテ・ポーヴェラの再展示、「歴史化」がもたらす経験の変容が論じられる。つまり、そもそも同語反復性と反イリュージョン性、つまり参照項の「貧しさ」を売りにしていたはずのアルテ・ポーヴェラが、この時期、イタリア内外の様々な会場に繰り返し展示されるうちに、むしろ異種混交的な「結び目」と化したこと、また、その都度更新されるサイトスペシフィックな展示を新たな性質として引き受けることで、新出のインスタレーション概念に接近したことが、ここで詳述される。アルテ・ポーヴェラという歴史の一回性は、ミュージアムによる作品収集の活発化も手伝って、再展示の可能性にすっかり置き換えられてしまったのである。この事態をわれわれはどう受け止めるべきか。著者の応答はしなやかだ。引き合いに出されるのは、ペノーネによって未来に投げかけられた彫刻＝ヴェナリア王宮庭園修復プロジェクトである。木々の成長に作品の生成を委ねることで生じる流動性。授けられる別の時制。ペノーネに限らないだろう。思えば、他のポヴェリスティにとっても、プロセスや変化は当初より重要な要素であったことをわれわれは知っている。最大公約数でみる厳密さよりも最小公倍数を求める意識こそが、歴史をうまくすくいあげる。

さて、以上のような五章をもって、本書はアルテ・ポーヴェラの歴史と現在を見事に語り通す。上述の「デポジト」に加え、「アルテ・リッカ」に関する分析、あるいはグロトフスキー、ロンツィ、パゾリーニへの言及など、60年代の状況を細やかに紹介すると同時に、とりわけ今世紀の批評的展開も遺漏無く押さえる記述・分析は、アルテ・ポーヴェラ研究の更新という点で、きわめて重要な成果である。加えてランシエール、アガンベン、ナンシー、ラトゥールらを引きつつ、イメージ・制作・実践をめぐるアルテ・ポーヴェラの特質や位置をより精緻に捉える試みは、哲学思想の援用という域を超え、現在の美術の状況とアルテ・ポーヴェラの関係（の可能性）を読者に示唆するものである。また、各章末尾に、それぞれの章の中心的な話題と関連する作家・作品に関する節が、小括的に付される点も見逃せない。これが非常にわかりやすい。また、論点をチェラントの軌道からうまく外していく契機となっている。

そう、アルテ・ポーヴェラを論ずるうえで重要なのは、チェラントの求心力からいかに逃れるか、ということであろう。自身の言説とイニシアティヴ（プライオリティ？）のなかで、運動の一部を強力に「正典化」しつづけてきた、後年の彼の「首尾一貫性」を、いかに跨ぐか。この観点において、本書の三章、四章の意義は大である。チェラント抜きでアルテ・ポーヴェラを語りえている。また、いわばアルテ・ポーヴェラ「外典」の作家、ジラルディにかなりの記述を割いているのも、本章の長所と言えるだろう（評者としては、看過されがちなピアチェンティーノにも興味が募るところである）。さらに、あえて言えば、もう少し歴史を遡る（チェラントの射程外の）記述が付加されてもよかったかもしれない。たとえばデュシャンの「再登場」（1964年にシュヴァルツ画廊がレプリカ製作）とマンゾーニの不在（1963年歿）が交差するミラノの状況である。そこにトリノという触媒、ボエッティ流に言えば、「金物店」が加わって開けた解放区、それこそがプロト・アルテ・ポーヴェラであったという見立てだ（とはいえブクローのように、ブッリ、フォンターナ、マンゾーニと先駆者を並べ立て、イタリア20世紀美術史という別の正典にアルテ・ポーヴェラを収めてしまうことは避けたいが）。

しかし、なぜ脱チェラントなのか。一言でいえば、脱中心的、多元的な今日の芸術状況を俯瞰するとき、チェラント流の正典化がいかに近代的に過ぎるからだ。北米中心の現代美術史に抗してゲリラ戦を戦い抜き、殿堂（美術館）入りを果たすベテランとして、ポヴェリスティを迎えるよりも（西洋近代のなかの他者というイタリア的なもののクリシェに収まる話だ）、世界各地の異種混交的な芸術実践のひとつとしてアルテ・ポーヴェラを開きつづけることはできないか（じつは、こうした脱中心的な思考や身振りこそ、60年代のチェラントがアルテ・ポーヴェラに託したものであった）。評者自身、最近、あらためてアンセルモの展示をすすめたのも、この思いによるものだ（あいちトリエンナーレ2016）。著者が結論で語る芸術における「生」もまた、この開かれに関わるだろう。紙幅の都合で割愛された論点も多々あったことと思う。充実した本書を著者自らさらに更新する続編の登場を、心より期待したい。